

# 会誌

第 28 号

昭和 63 年 3 月

28

卷頭言 .....	小林貞作	
研究発表		
1. 片貝川南又谷の水生昆虫 .....	川添憲三	1
2. 人工物に営巣したイワツバメの造巣能力 .....	大田保文	14
3. 双翅類の訪花植物Ⅱ .....	田中忠次	18
4. 富山県におけるコモチシダの北限について .....	本瀬晴雄	40
5. スダジイの林を訪ねる .....	中川定一	48
6. 安房峠周辺にみられる針葉樹林の2林分 (コメツガ林、カラマツ林)について .....	佐藤卓	61
7. 全国および富山県の巨樹・名木とその特性 .....	本多啓七	67
本会記事 .....		95
編集後記 .....		96

## 富山県生物学会

## 巻 頭 言

会長 小林 貞 作

ようやく春風駘蕩の日和が多くなった。長かった冬の寒さに耐えてきた木々は、その冬芽からほころぶように新芽が萌え出てくる。今は、植物生長開始の摂理の時季でもある。

しかし、よく考えてみれば、このような木々の春の新芽は、実は寒さや障害に対して固い鱗片葉で武装し、やがて訪ずれる小春日和へ向けての生長戦略を果すのである。そしてさらに、これらの芽は、前年の夏から秋にかけてすでに作られるのだ。この巧妙な準備のよさに舌を巻く次第である。植物は、太陽系の摂理に合わせ、地球の四季にちゃんと見事に対応しているのである。

それにしてみると、新人類はいざ知らず、われわれ人間は、植物のように物質生産のできる独立栄養ではなく、他に食べ物を求める従属栄養でありながら、世界的にみると、食糧やエネルギー源の備蓄・確保にこと欠くような始末である。人間の生き方が、植物（学）にはじめて教えられるような気がする。科学は、人間の生き方、考え方にいろいろな示唆を与えてくれる。

ところで、バイオテクノロジーの一つには、上記の植物の新芽の生長点を用いて、人為的に細胞単位でたくさんの新芽分化・増殖させようとする研究技術がある。つまり培養によってたくさんの幼苗・稚苗を育てようというのである。これには、培地や培養条件にもよるが、比較的容易に育つものから困難なものまで、植物種によって可成り異なる。しかし、基本的には、細胞の生長開始（細胞核分裂）させるような好培地や好培養条件を与えればよいわけだがまだ多くの植物について基礎的な観察と実験が十分でない現状である。

木の芽の話からバイテックの話になったが、わが富山県生物学会は、創設以来基礎生物学、すなわち、分類・生態・生理・細胞などの各研究分野で、多くの業績を挙げてきた。このことは、対外的には大きな誇りであり、また、対内的には会員への大きな励ましでもある。

その意味において、今回、本会誌28号発刊を心から祝福すると共に、会員諸氏の今後一段のご活躍を期待申し上げる次第である。